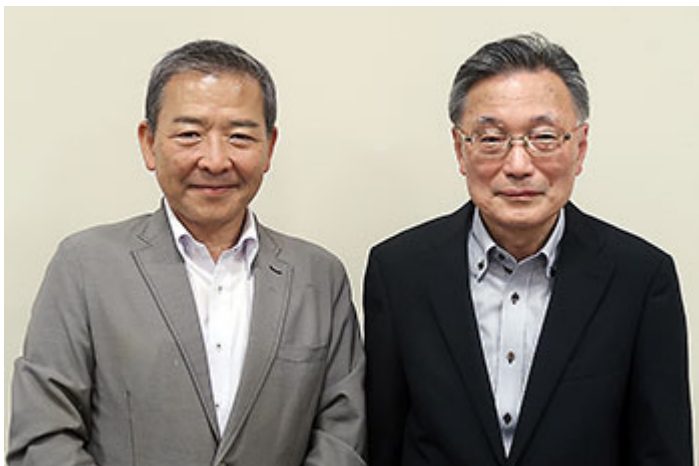


【薬大トップに聞く】きめ細かな薬学教育実現-高崎健康福祉大学薬学部

薬大案内

企画

05面



左から松岡氏と寺田氏

高崎健康福祉大学薬学部薬学科（群馬県高崎市）は、学生一人ひとりの学習状況に合わせて担当教員がアドバイスするなど、1学年90人のスケールメリットを生かしたきめ細かな薬学教育を行っている。教員間の相互チェックにより一定水準以上の質を保った講義も提供しており、地元の病院や薬局に継続的に薬剤師を送り出して地域の医療ニーズを支えている。病院薬剤師を中心に研究意欲の高い卒業生を受け入れるなど、大学院教育の充実も図る。

アドバイザーが学習支援

6年制薬学部薬学科は、大学の理念である「自利利他の精神」のもとで薬学に関する専門知識・技能を修得し、▽豊かな人間性と倫理観▽基礎科学的知識・技能▽薬学に関する実践的知識・技能・態度▽論理的思考力・問題解決能力▽コミュニケーション能力▽生涯学習力——の六つの能力と資質を備えた薬剤師の輩出を目標としている。

地域の医療需要の高まりを受け、群馬県薬剤師会と群馬県病院薬剤師会の支援を受けて6年制薬学教育がスタートした2006年度に県内初の薬学部として開設された。開設に携わった松岡功学科長は、「地方の大学だが、地域のニーズに支えられている薬学部だ。薬剤師国家試験の合格だけを目指すのではなく、薬の専門家に相応しい資質と能力を身につけ、医療現場や地域社会で活躍できる薬剤師の養成に注力している」と説明する。

4年制薬学教育のノウハウや実績なしに6年制でスタートしたが、松岡氏は「ゼロからカリキュラムを構築してきた背景があるために、薬学教育モデル・コア・カリキュラムが改訂されても教育体制を大きく変更せずに開設当初からのシステムで十分に対応できている」と強調する。

薬学部の特色は、開設時から一貫して行っている1学年90人の少人数教育だ。学生3~4人にアドバイザーとなる講師以上の教員が1人ついて学習をサポートする体制を構築している。低学年・中学年・高学

年ごとにグループ分けした上で、成績が振るわない学生を低学年時から教員が個別に面談し、一人ひとりに適したアドバイス等を行う。個別指導は学内に設けた「薬学学修支援センター」が担い、学生の成績をモニタリングして成績の上下を全教員が把握している。

センターで学生指導に関するノウハウを蓄積しているため、熱心に学習に取り組んでいる学生や奮起を促す必要がある学生などアプローチ方法が異なり、学生の状況に合わせて指導方法を工夫している。寺田勝英学部長は、「メンタル面で不安定になりがちな学生にもきめ細かくサポートする体制が整っている。成績良好な学生を含め、全ての教員が全学生の名前を把握しており、これは定員90人だからこそできるもの」と胸を張る。

薬学部のスケールメリットは学生と教員の間だけでなく、教員間でも見られる。各教員が講義内容を相互に確認する講義見学会を年2回の頻度で開いており、講義後に改善すべき点などをアドバイスし合うことで、より理解しやすい講義内容につなげている。

薬学部は実習科目が多いが、教授2科目、准教授3科目など、教員の肩書きに関わらず、全教員が実習を担当する。実習で学生と接する機会を多く設けてコミュニケーションを促しており、定期試験や入学試験の試験監督も全ての教員が平等に担っている。教員間で頻繁にコミュニケーションを取ることで、講義の引き継ぎが必要な場合も円滑な実施が可能となる。

6年制薬学教育の中心である臨床薬学教育については、実務系教員で組織した「臨床薬学教育センター」により、実務事前実習やOSCEの実施はもとより、5年次の薬局・病院における実務実習において、学生一人ひとりの状況に対応してきめ細かいサポートを行っている。また、同センターが核となり、県薬剤師会と県病院薬剤師会との間で薬学連携体制を取っており、生涯研修セミナーなど学術集会の開催、実務系教員が週1回薬局や病院に出向いて最前線の薬剤師業務を学び、講義や実習に新しい情報を反映させている。

医療現場でも必須となるコミュニケーション能力の基礎は1年生の段階から身につけるよう重視しており、大学の訪問者や清掃業者にもあいさつするよう学生に徹底させている。

健康福祉学部や保健医療学部など他学部と分野横断で多職種連携に関する講義や実習を行っているほか、群馬大学と連携教育締結して双方の大学で講義を受けることも可能としている。群馬大医学部の学生が薬学研究入門として簡単な実験・研究を行うことができ、高崎健康福祉大の学生も卒業研究を群馬大で実施できる。

入学者減少による募集停止や国試の合格率低迷に悩む私立大が少なくない中、高崎健康福祉大薬学部は開設年から定員割れを起こさず、少人数教育が一定の成果につながっているという。松岡氏は薬学部の実績として、「伝統校の薬学部と遜色ない国試合格率と卒業率」と触れた上で、「皆で風通しの良い環境を創り上げてきた大学だ。真面目で素直に努力する学生が多く、全員で学習して全員で卒業しようという考えが根付いており、大学の伝統になってほしい」と考えている。

病院薬剤師不足解消に貢献

7割弱の学生が地元の高校から進学しており、学生の多くが卒業後も地元の病院や薬局で勤務することを希望する。近年では4割が病院、6割が薬局への就職を求め、地元の病院や薬局、ドラッグストア等が大学で説明会を設け、実際に希望先での就職を実現する学生が多い。

病院薬剤師の慢性的な不足が社会課題となっているが、寺田氏は「病院の就職希望は多く、地元の病院薬剤師不足の解消に貢献しているのではないかと捉えている。

薬学部卒業生は現在までに1000人を超え、県内の2割超の薬剤師が高崎健康福祉大出身者だが、寺田氏は「卒業後は病院や薬局の薬剤師となるイメージが強いが、薬剤師以外の職種に就職した卒業生もいる。薬剤師の資格を取得することで様々な職種に就けることが可能であることを改めて教える必要がある」との考えも示す。

一方、当面の課題として、大学院の充実を挙げる。従来は毎年1～2人が大学院に進学していたが、近年は進学希望者が減少傾向にある。松岡氏は、「薬学生は薬剤師になることを目指しているため、全国的にも大学院に進学するマインドが小さい。薬学部在学中に進学を意識してもらうため、来年度から研究への意欲がある学生は2年生から研究できるようにする」との方向性を示す。地元で就職した卒業生にも目を向け、病院薬剤師を中心に、研究意欲が高い社会人の受け皿としても機能させ、学位取得につなげたい考えだ。

さらに、次期コアカリ改訂について、国は創薬につながる薬学人材養成のための教育内容について検討する方針を示しており、寺田氏は「大学院の充実にも関連するもので、臨床薬剤師の養成を進めてきた本学にとって臨床教育と基礎研究を同時に高めることは高いハードルだが、対応できるよう準備を進めていく必要がある」と話した。

(C) 1997-2024 Yakuji Nippo, Limited